

引き揚げて自立自営の開拓

宮城県 井上 隆

私は宮城県志田郡松山町尋常高等小学校を昭和八年三月卒業。四月より松山町青年学校に入学し家業の農業に従事していたころ、満州少年試験移民があることを聞いた。兄弟が十一人もいるので自分一人がいなくてもよいと考え、また当時、家には水田三町五反、畑二町二、三反があつたが、これでは満州に行つて独立をした方がよいと考えて、家族には相談もせず覚悟を決めたのである。

そしていろいろと世間の情報を聞いてみると、当時南郷村では移民が盛んに行われていたことがわかった。既に一搬開拓団には相当数の人たちが送り込まれていた。その中で皆川七之助様を中心となって事を進めていたので、皆川様を訪問して少年試験移民に参加希望を申し入れたところ、即座に認められ、南郷村の参加

者と共に茨城県の内原訓練所に行くことになつたのである。それから家族に話したところ反対されたけれども、なんとか納得させ、結局満州に行くことになつたのである。父は私が尋常高等小学校を卒業する二月に亡くなつていたので、自分としてはあまりにも気ままであつたと思つてゐる。

茨城県内原訓練所に入つたのは六月である。訓練所に入所してみると他県の人たちも一緒であつた。当時内原には大した設備はなかつた。炊事場兼食堂、宿舎、講堂、体育場、神社で洗面所は井戸端であつた。当時、私たちは友部高等国民学校の委託学生として、内原にての訓練と聞いていた。作業はたいした苦勞ではなかつたが、一番の苦勞は食事であつた。食器一杯の御飯ではどうにも足りなかつたが、幸いに自由食があつたから助かつた。でも自由食を取るにもお互いに競つて取り合つたことを思い出す。また講議の時にはだれともなく眠気がさし高イビキが聞こえてきたりするが、それでも講議の先生はしかることはなかつた。また行軍の時にはわか雨(雷雨)となり、ずぶ濡れになつ

たこともある。さまざまな訓練を受け、いよいよ渡満となると、お互いの肉親が大勢面会に内原まできた。

私には父が亡くなっていたので、一番上の兄が南郷村の方々と面会にきてくれたので大変嬉しかった。

昭和八年七月出発のときは加藤完治所長の訓辞を受けて後、内原の弥栄神社を参拝して内原駅へと向かい、駅にてお互いの肉親と別れ、車中の人となったのである。東京で下車をして皇居を参拝し、東京の青年会館に一泊、また車中の人となり、今度は伊勢神宮を参拝してから敦賀港へと向かった。敦賀港では自分たちが乗る船「サイベリヤ丸」が待っていた。船に乗ると今度はいつの間集まったのか、大勢の見送りの人たちがいっぱいであった。また見送りの人たちと私たちの間は紙テープでつながり、船の汽笛が鳴ると「万歳、万歳」でなんととも言えない感激であった。船は岸壁を離れいよいよ日本海を渡り目的の地満州へと向かった。船の中では何か考えている者、四、五人で何かしている者さまざまだが、海は静かで船に酔う者はなかった。何時間かが過ぎて船は朝鮮の清津港に到着した。

下船してから清津の宿に一泊したが、清津に上陸したときに感じたのは臭いであった。生まれて初めて外国人との接触だから特に感じたのである。宿の人は全員日本人であり、待遇は大変よかった。

翌日は汽車の人となり、今度はいよいよ満州国に入り目的地の饒河ニウガを目指した。途中、鉄道の沿線近くに入植した第五次黒台開拓団コクダイ、ほかの団を車窓より見ていたが、土地の広いことに第一番に驚いた。そして密山に一泊したときに、黒台開拓団に入植した宮城県出身者が、わざわざ宿まで激励にきてくれた。それは私たち同志の中のお兄さんやら南郷村の人たち五、六人であった。そのときは大変嬉しかった。知らない土地で同県人に会い、いろいろと現地での注意などを受けた。本当にありがたかった。また翌日汽車の人となり、ようやく虎頭コウトウに着いた。内地で見たこともないこと、それは日本兵が汽車に乗って警備する警乗兵であった。満州事変後まだ治安が悪いためであった。虎頭では船の中で一泊した。

翌日虎頭を出発して今度はいよいよ我らの目的地で

ある饒河である。虎頭より饒河までの船は同昌号であったと記憶している。船は鳥蘇里江（ウスリー江）を下るのであるが、水車のようなので水をかいて走る。初めて見るのでみな不思議に思った。また、ウスリー江を船が走るときは、満州国、ソ連の両国間の協定により国境がないとのことを後で聞いた。そう言えば船はソ連側を走ることであれば満州側を走るときもあつた。また軍の攻防艦も同じく、どちら側も走るのである。いろいろと話を聞いているうちに饒河に到着した。

饒河では大和村北進寮の先輩各氏、軍・官・民及び日滿の一般民も大勢出迎えてくれて大変感激した。七月二十二日であつたと記憶している。先輩の案内で大和村北進寮に第三次生として入寮した。寮長の法元先生、三宅一先生より現住民及びソ連などに対しての、いろいろと注意事項を受け、また北進寮では先輩たちの心のこもつた赤飯で大歓迎を受け、赤飯は特においしかった。それから毎日赤い御飯が出るので不思議に思つたところ、それは高梁アサガオ御飯とわかり、がっかりした。歓迎会のときの赤飯は本物の赤飯であつた。

それから第一次・二次先輩と種々行動を共に約一年半ほど同じ釜の飯を食し、起居を共にした。その間先輩各氏より学んだことは後で非常に役に立つたのであるが、いつの間にか義勇軍に編入されて、義勇隊の取扱いを受けていたのである。先輩各氏と別れて生活を始めるときは、私たちには指導員がいなく、自分たちで自発的に長を立て、計画立案をして作業を進めた。その最初の長は宮城県出身の須田喜三郎氏であり、その後訓練本部より山梨県出身功力辨一指導員が派遣されてきた。

饒河での最初の作業は麦刈りであつたが、私は出身が農民なので苦勞とは思わなかつた。秋には先輩たちと山に山ブドウを採りに行つた。また山ブドウからブドウ酒も作つたが、飲んで中には酔つぱらって体を悪くして作業を休む者もいた。日曜日などは町に遊びに行くのが何よりの楽しみでもあつたが、当時、満州では治外法権が撤廃されたばかりで大変危険であつたので、そのときは護身用に拳銃を身につけて歩いたものだ。先輩たちより非常呼集をかけられ、そのときの完

全武装の仕方、また五分以内に完全武装をして指定の場所に集合することなどを教えられ、後で大変役に立った。

先輩と別れてからは兵器弾薬係と警備係となり、日夜の警備の編制、弾薬の補給などが仕事で、日曜日になると隊員は山や野原に狩猟に出掛け、小銃で射撃をしてくるので、弾薬の補充が大変であった。作業をするときは必ず歩哨を三、四カ所に立て、作業をする者はいつも身近な所に兵器を置いて作業をした。

ある夜、約四キロばかりの所の三義屯という朝鮮人部落が匪賊の襲撃に遭ったときは、歩哨からの連絡で、すぐ非常呼集をかけ、全員部署に付き一晩中警備した。また冬期間は満人が憲兵隊の新運搬の警備に毎年のように付いていたが第一回警備の最後にきて山の陰に匪賊がいて、満人の牛や馬を捕り終えてから我が方に射撃してきたので、我が方は一時後退し、軽機関銃一丁と小銃などで本格的に応戦撃退したので、我が方に損害はなかった。ただ満人には、馬や牛が匪賊に捕られたので、あとで県の方でいくらか損害保証をしたと聞

いている。二年目も同じく村が、匪賊襲撃に遭い、交戦中との連絡を受け、直ちに非常呼集をかけ馬糧で応援に行く途中、我が方の反撃が強かったので匪賊が逃げたといつて戻ってきたので一安心。我が方は事故者もなく済んでよかった。その後守備隊が討伐に出たところ、その場所に死体があつたと聞いている。また秋になつて冬期間家畜に与える草刈りをしていたとき、今度は警察隊が匪賊討伐に行く途中、隊員が匪賊と間違えられ交戦し、そのときは本部に近い所だったので至急警察と連絡を取り中止し、お互いに事故がなく済んでよかったと警察隊長と握手をして喜んだこともあつた。

饒河での楽しみは故郷からの便り、また朝夕山野に出て小銃でキジやノロ（鹿の一種）を撃ち捕つて帰り、みんなでスキ焼をしたりして食べること。また冬期間、隊員が山に行きイノシシ狩りをして馬糧に載せ運んで帰り、家の中で解体して各室に配給して、さまざまな料理をして食べること。盆と正月には隊員全員で宴会をすることなどであつた。匪賊との交戦等では一人の

事故者もなく北進寮にて先輩たちより種々訓練を受け、またよく学んだお陰と感謝をしている。

昭和十三年先輩各氏と別れて別生活をする兵舎の建設にとりかかる。昭和十四年冬開拓団を建設するため代表を訓練本部に派遣し、種々交渉の結果自分たちの好きな場所に入りなさいとの話があった。帰饒途中代表の一人が佳木斯の東宮記念館に立寄ったところ、東宮先生とは縁の深い新潟県出身の山田與四郎さん、(当時東宮記念館の主事をしていた)と会い今までの経過を話したところ、こんどは山田さんと高橋さんが現地踏査をして湯原県^{しんめい}農明地区に決定したのである。本当に山田さんには大変協力をしていただいた。訓練本部との交渉の代表は宮城出身須田喜三郎、山形出身の高橋吉衛、長野出身の五味正博氏の三人であった。昭和十五年春、解氷と同時に農具、家畜、食糧、入隊者の荷物ほか一切の荷物と共に饒河、佳木斯間を船を貸切って大移動をしたのである。その時点にて鉄驪^{てつれい}訓練所より交代の訓練生が到着したので、事務引き継ぎに代表として宮城出身の佐藤知氏を残留させた。

農明は当時住居もない地帯で何もなく、ただあるのは駅舎と駅員の入る家ぐらいであった。また機関車の給水設備があった。地区内には、七、八十メートルの川もあり駅もありで大変便利なところもあれば不便なこともあった。農明に移動してまず入る家がないので、伐採業者の労働者(クーリー)の入る小屋を一時借りて入った。また駅の近くにテントを張って分散して入り生活をし、そして材木を集めて最初に宿舍兼事務所と倉庫を建て、出来上がるのを待つて移り、本格的に団の建設に取りかかり仕事を進めた。団と駅の間には川があり、往復するのに船を利用するのだが、なかなか不便なため今度は両端にワイヤーロープを張りロープに滑車を取りつけ、それにロープを取りつけそれを船の両端にむすびつけ、水の流れを利用して船を走らすので、大変楽に往復ができたのである。

私が公用で佳木斯に出張したときに、ある東宮公官員に会った際、いろいろ話をしていううちに山田さんを団長にしてはどうかと言われた。その話を団に持ち帰り同志と相談した結果、全員賛成と決まり、その旨

を公官員に伝えまた公官員と私と二人で山田さんと会ってその旨を告げたところ、心よく引き受けてくれたので大変よかった。後日、正式に団長に迎え入れたのである。団の建設に当たっては、団長とも意見の交換をしたり、また地区の山は全部石灰岩なので、将来は団としてもセメント工場などを造る考えであり、また水田を造成するのに測量を満拓に依頼したり、個人人家の建築のための製材機一式、臼摺機、精米機、精粉機などを全部満拓に依頼し、機械の運転は全部私が受持つ。ただ製材機の製材技師はほかの団から協力していただき、また動力は十七馬力の横型ディーゼルエンジンで、運転は私が受け持った。故郷にいるとき、共同の臼摺機械があり、その助手をたびたびしていたので、若干の知識があったから受け持ったのである。

また晨明に来てからも警備兵器弾薬の主任をし、製材は技師にいろいろと教えてもらったので製材の方も受け持った。実際に製材をしてみるとなかなか大変であり、丸鋸の修理はそれこそ大変であった。私が警備会議に二、三日出張して帰ると、だれかがエンジンを

動かして故障をおこして動かないこと度々であった。私が手をかけるとすぐ動くのである。そうして四部落に各十個ずつ建築したのである。また団員が軍隊に行くので団員不足の関係上、昭和十五年の秋、補充団員として内原より五十人を入団させた。これらの人を迎えるべく福島出身の瀬谷嘉治氏を派遣する。

昭和十七年に補充団員の家族を内地より呼び寄せたり、また団員も花嫁を迎え団も一段と活気づき、すべてが順調に進みつつあった。団長が新京に出張した際、鉄驪訓練所のラップ鼓隊の連中、大部分が岩手県出身を連れてきて、隣り地区の樺陽第一次義勇隊開拓団を設置、団長両団を兼務する。団の建設も充実。水田から米も穫れて物も充足してきた。

ある朝、私が加工場にて仕事をしていたとき、団長が「心配ができた」と言って入ってきたので「何が出たのですか」と聞くと、「井上に召集令状がきた」と言うのであった。時に昭和二十年五月であり、すぐ入隊となった。そのとき、団では（私を入れて）三人の召集であった。私が入隊する部隊は八面通の第八三部

隊で工兵であつた。その後、幾日か過ぎてから今度は本溪湖の部隊に転属になり、八月一日に陸軍一等兵に進級した。そのときは大変嬉しかった。

八月十五日終戦。部隊は奉天へと移動して奉天の貨物廠の所に集結させられた。生活に必要な物資を確保し、兵隊たちが避難する列車の中の難民に食べ物をどんどん入れてやったことなどあつた。そうしているときに連隊長命令があり集合をしたところ、薄暗くて相手の顔などは見えないので連隊長が今日は遅いから明朝集合するようにとの伝達があつた。そのとき、ソ連の兵隊が周りに大勢きていた。そこで自分たちの仲間うちでいろいろと考えた。これは捕虜にされるのではないかとの意見の一致をみて、その晩の一時ごろに八、九人で脱走をした。

途中満人部落に立ち寄り、軍服と満人服とを交換し、満人に変装して、知らん顔をして虎石台コセキダイの駅に行き、汽車の来るのを待った。そのときに師団指令部の下士官が脱走したので兵隊たちが一生懸命探していた。その脱走した下士官も皆変装していたのが自分たちにも

分かったが、皆知らんふりをした。そうこうしていた所に新京より朝鮮に疎開した汽車が逆戻りしてきたので、それに皆で乗った。日本語は使用せず満語を使用した。その汽車に乗っていたのは、女・子供ばかりで非常に怖がつていたが、二、三の駅を通過したところで「奥さん方兵隊の疎開ですからよろしくお願ひします」と、そこで初めて日本語を使ったので、奥さん方は大変びつくりしていた。

それから奥さん方といろいろと話して腹の悪い方には腹薬を、風邪を引いている方には風邪薬をあげた。その薬は虎石台の貨物廠から持ってきたものだった。そうこうしているうちに新京に近くなり、情報によると新京本駅に暴動があるので、本駅に行けないから南新京にて降りてくれとの連絡である。南新京に列車が着くと各自三三五五に分散して行つた。

私たち兵隊はどこにも行きようがないので、汽車の中で知り合つた女の方々の住所を聞いていたので、そこで話してお世話になることにしてその住所を尋ねてみた。私は度々新京に出張をしていたので、案外町

は知っていたので早く住所を知ることができてよかった。奥さんは三人とも二階の部屋だった。同年兵六人で話したところ、奥さん三人が相談の結果、真ん中の部屋をあげて貸していただき、その室の奥さんは端の部屋の奥さんと一緒に生活することになったのである。ソ連兵が女性をあさるので男がいてくれて大変助かると言っていた。本当に私たち同年兵六人も非常に助かったのである。それから六人で生活が始まった。

軍隊で最後にもらった金をお互いに出し合ってその金で生活を始めたが、金はいつまでもあるわけではなく、六人で相談して持ち金で米を買い、それを炊いてお握り売りを始めたところ、実によく売れて大繁昌をしたのである。そのとき、お握り一個をいくらで売ったかは忘れてしまった。そうしているうちにも、開拓団員の家族が難民となつてどんどん新京の町に入ってくるのではないか。身ぐるみ剥がされて南京袋で腰を巻き、南京袋を着て子供をかかえ荷物を持っている有様は、とうてい筆舌に尽くし難い。そこで私がいたことのある団の方々ももしや新京にきていないかどうかと

思い、日本人会を二、三回尋ねてみたがいなかった。そして四回目に日本人会を尋ねたときに、後ろから「井上さんではないですか」と声をかけられ、振り向くと団の家族四、五人がいるではないか。「井上さん、みんな待つているから、ここから一緒にみんながいるところに行きましょう」と言うので、「それではみんなここで待つてほしい。私にも同年兵が五人でいたのであいさつもしたいし若干の荷物もあるから持つてくるから」と言つて一たん別れ、部屋の同年兵や奥さん方にも別れのあいさつをして待たせていた団の方々と一緒に団員及び団員の家族のいる所に行った。あいさつをしようとしたら、みんなが「あいさつなんかいらないから早く室に入りなさい」と手を取つて室に入れてくれた。そのときは何とも言われない嬉しさでいっぱいであった。そのときは団長が兼務した樺陽開拓団の人たちも一緒であった。総勢八十人以上で、そこには団外者もいたのである。

終戦直後、晨明・樺陽より新京に到着した人員はまず晨明から団員家族男十五人、女二十二二人、計三十七

人、次に樺陽の男十二人、女十五人、計二十七人、両団合わせて六十四人である。また団外者の男八人、女十二人、計二十人総合計八十四人である。なお、農明・樺陽両団に避難途中、若干死亡者があつたと話している。終戦時、無事避難できたのは地区内に駅があつたためで、また県よりの連絡で何の被害もなく無事避難できたことは何よりも喜ばしいことであつた。私が皆と一緒になつたときに、団長も小学校校長もおられた。小学校校長の出身は茨城県だつた。早速団長が私のところに来た。「これから寒くなるし、この家族を守り、また零下二〇度・三〇度になる冬をどうしたら過ごすことができるだろうか」と相談を持ちかけられた。そこで私は饒河にて先輩や同志と何年も共同生活をしたことを思い出し、「まず当分の間、共同生活をしたらどうですか」と話したところ、団長も賛成しすぐ全員を集め、団長が説明をし、私が補足をして共同生活に入った。

その間に仕事を探すが、ただ働くだけでは駄目だと思つた。零下二〇度や三〇度にもなることを考え

ると、まず燃料が第一に必要と考え、団長と二人で新京機関区を訪問した。機関区の助役（大和田清吉）さんと種々話をしていたら、「あなたは何県出身ですか」と聞かれ、「私は宮城県です」と答えると、「自分は福島郡の郡山だ。それでは何も聞くことはない。明日から働ける者は何人でもよいから連れてこい」と言われ、病人以外働ける者は全員働かせていただくことになつた。給料日には給料をいただき、その上毎日帰るときには石炭を少しづつもらつて帰り、それで炊事をした

り、ペチカを暖めて寒い冬を少しも寒くなく全員過ごすことができたので、大和田助役さんに感謝でいっぱいであつた。そうしているうちに疫病がでて、団長や小学校校長も発疹チフスで他界されたので、千早町菊水第六班第七組長となり、およびながら八十数人の組員を世話した。ソ連兵が女性をあさりにきても決して手を出させなかつた。隣組長は日本会の囑託で、日本人会の腕章を常にかけていたので、非常に役に立ち助かつた。

昭和二十一年六月末ごろに引揚げの話があり、新京

で亡くなった方々全員を火葬にして、各遺族に渡しして準備を着々と進めた。火葬のときの燃料は若い者を督励して、元陸軍の飛行場の格納庫の材料を幾日も貯めておいて、それで火葬をしたのである。お産をして親が死んで子供が残ったり、また子供が死んで親が残ったりした者は一緒に組ませて、子供の親元に届けるようにした。また重病人は引き揚げる事ができないことは当局より通知があり、それをよく重病人に言いさせたところ二、三人の重病人は井上さんの指示に従うから、是非内地まで一緒に連れて行ってほしいと懇願された。そこで私の判断で重病人も一人も残留させず、無事内地まで引き揚げる事ができたのである。

あとで聞いた話によるとそのときの病人は故郷に帰って亡くなったと聞いた。故郷で亡くなった方はさぞ本望であつたらうと陰ながら線香を供えた。

引揚げの際に大和田助役さんが、わざわざ私たちのところに来て無事に日本へ帰ったら元気でいることを伝えてほしいとの依頼を受け、所書きをいただいた。

帰宅後、早速郡山の実家に手紙を出したところ、郡山

まで来て話をしてくれとの返事だったが、なにせ体も弱っており、金もなかつたので手紙だけで連絡をした。また何年か後に郡山の方に大和田助役さんが帰られたかどうか連絡をしたところ、甥御さんに住所を教えてくださいました。早速、東京におられた大和田助役さんのところに、在新京時にお世話になつたお礼を書き手紙を出したところ、早速返事をくださり、よく探してくれたと大変喜んでおられたとの様子であつた。私も非常に嬉しかつた。あの混乱の中でお世話になり零下二〇度や三〇度の厳寒の冬を無事過ごせたのも、大和田助役さんのお陰であり、とうてい忘れることはできないことであつた。秋に東京の方に用事があり、お宅に立ち寄つたところ、よくきてくれたと大変喜ばれ、いろいろ当時の話をしていたところ、「あなたは体が小さい割に度胸があつた」と言われた。それは、夜間作業のときにソ連の兵隊を連れてきて酒をのませ、私たちが石炭泥棒をしたときに逆に警備をさせていたことなど、よく助役さんは知っていたようであつた。

私は引き揚げてから、若干の土地をほしいと話した

ところ、母と兄からお前は勝手に満州に行ったのだから何もやれないとの返事であった。当時、実家には水田三町五反、畑二町歩ほどあった。戦争に負けてなければ帰ってはこない。それならよし、実家に頼る自分が悪いと考えなおし自分の味方は自分だけと思い、自分で山を調査して開墾申請を出した。平地の荒地を借りて食うや食わずで開墾し水田を作り、また畑から野菜を採るなどしてなんとか生活の基礎を作り、家を作る土地を他人から借りてバラックの家を造って入った。それまでは、すぐ上の兄のところ親子三人が世話になっていた。

山の開墾申請の許可が県より届いたので本格的に開墾を始め、また金が無いので日雇いに行ったり、開墾する道具がないので借りて使用し、その代償として働きに行ったりした。またバラック屋根は紙葺きで雨が降ると雨もりで大変であった。電気もなく、なにかの小さいビンを利用してランプの代用にして、なんとか親子三人で生活をしていた。周囲の人たちに旅行に誘われてもそれまでできなかった。それこそ想像以上の生

活であった。夏になるとキャンデー売りがあるが、それを子供に買ってやることができなこともあった。開墾畑もよくなつて野菜も世間よりよくできるようになり、運搬車となる自転車を買車店とよく相談して月賦で購入して一日おきに野菜売りを始めた。当時月給が七、八千円くらいと思う。そのときに野菜の売り上げが年間八十万円くらいであった。それから家を直したり、電気をつけたり、家畜の牛を飼育して子取りをしたり、また少しづつではあるが良い水田を買ったり、山を買ったり、屋敷を買ったりした。また子供を高校まで出せるようになり、その間村の役職、町の役も全部断って、世間の方々のようになるよう努力をしてきたのである。

私が六十歳になったとき、長男が県の外郭団体に就職をしていたが、ある時、「父さん少しは業したら」と言ったことがあった。長男も親の苦勞をよく知っていてくれているとつくづく感じた。それから若干、村での役を引受け、今までにお世話になったお礼の気持ちで仕事をさせていただいた。老人クラブの役員など

もして現在に至ったが、一昨年秋ごろより体の調子が悪く、現在も月一回の割に病院に行つて診てもらつてゐる。でも結核やガンや糖尿病などではないから心配はない。病気には負けないよう毎日努力をしている現状である。

本当に人生と言うものはまず自分が世間から笑われないように、常に正直で真面目でなければならぬ。

そうすれば自然と世間が認めるものである。また昭和五十七年七月に満州で亡くなつた方々、また先祖様の供養と考へて、町内の桃源院任職第三十二世俊良泰彦禪師様の弟子となつた。毎年、秋の彼岸の中日には、お寺で檀家全部の大施餓鬼会を催し、大供養をしている。平成元年から松山町から満州開拓のため渡満して亡くなられた方々を、元義勇軍幹部の尾形道様、角田一夫様と三人で約一年間調査をして、平成二年三月に桃源院に拓魂碑を建立し供養をしている。人生というものはお互いに助けあい励ましあいそして協力してこそ、世間が成り立つのではないのでしょうか。私たちが終戦時にあの状況の中、菊水第六班では一人の犠牲

者もなかつたことは不幸中の幸いとも言えまじょうか。また、引き揚げ時にはすべてを残さず整理をして全部持ち帰り、残留者も一人もなく引き揚げてこられたことは全員が一致協力のたまものと深く感謝し、隣組長として行動してきたことについて少しも心残りはなく、過去を振り返りながら月日を送っている。また、引き揚げ後、私たち饒河少年隊第三次生の生存者約十三人の桜樹会会長として五十年も務め、一昨年来の病気のために会長を辞任して、一生懸命病気に負けないうよう努力中です。

【執筆者の横顔】

井上隆氏は、大正七年十月、宮城県松山町の農家に生まれた。

松山尋常小学校高等科を卒えて、青年学校に在學して家業に従事していた。満州開拓青少年義勇隊の広告を見聞して、渡満すべく思ひたつた。父母は許さなかつたが、固い決意を知つて、ようやく納得した。

昭和十二年六月、茨城県の内原訓練所で加藤完治所

長の訓辞を聴講し、基礎訓練を受けたのち、満州大陸の饒河に着いた。広漠たる大平原に驚喜しながら、作業、訓練、学科など、厳しさの中に同志愛の深さに感動しながらの日常であった。義勇隊の訓練を完了後、現地調査した結果、湯原県長明地区に入植となった。

昭和十五年五月、井上氏は警備兵器弾薬の責任者でありながら、農産加工と製材の両主任兼務の大わらわの多忙をきわめていた。昭和二十年五月、現地召集を受け、八面通の工兵第八三部隊に入隊となる。八月には本溪湖の部隊に転属となり陸軍一等兵に進級して欣喜雀躍した。八月十五日終戦となり部隊は解散となった。

井上氏はソ連軍は必ず日本軍人を捕虜にするとの予見から、同志六人とともに脱走を図り新京に入った。そこで晨明開拓団の人たちと涙の再会をした。樺陽の団員を含めて八十四人、生死をともに共同生活をして、井上氏の才覚で一人の凍傷もなく越冬できた。新京市千早町菊水第六班第七組長、八十数人の責任者として、昭和二十一年六月引揚げ準備を整え、帰国し、感謝さ

れ喜ばれた。

故郷に着いた井上氏は、自分一人で山を調査して開墾申請を出し、バラックの家を建てて荒地を開墾し、水田を作り畑から野菜を採り、親子三人でランプ生活を送り、正に臥薪嘗胆が続いたが、努力精進の結果、引き揚げてから五十年目で、土地を得て住宅を建て、水田、畑地に、牛を飼育し、野菜の売上げだけでも年間八十万円を得る農家となった。

満州で亡くなった方々への供養にと、寺の禪師の弟子となって、お務めしている井上隆氏である。

(引揚げ者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

妻と拓友の冥福を祈る

山形県 佐藤 末 児

私は明治生まれの八十六歳になり、心身共に老化を自覚するこのごろです。小学校を出てから、根っから